

「野生の稗」の方言分布とその解釈：
富山・岐阜・石川県境地帯における

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/23692

「野生の稗」の方言分布とその解釈

—富山・岐阜・石川県境地帯における—

真 田 信 治

一、はじめに

栽培する稗に対して、稲田に雑草として自生する稗がある。この野生の稗のことを、富山・岐阜・石川県境地帯では、「へー」、「タバ」、「オロ」などと呼んでいるが、このような呼び方には地域差がある。そこで、本稿では、これらの語がどのような変遷を辿ったかを、この野生の稗の方言分布図と、栽培した稗の方言分布図との重ね合わせによって探ってみようとするものである。

なお、本稿では、以下、この野生の稗を「野稗」と称し、栽培した稗を単に「稗」と称することにす。

二、資料について

本稿で扱う資料は、富山・岐阜・石川県境地帯において一九六七年から一九六九年にかけて行なった言語地理学的調査から得たものである。調査地域・地点の詳しいことについては、すでに次の論文

で述べたので、ここではくり返さない。(注1)。

拙稿「富山・岐阜・石川県境地帯における「螢袋」の方言分布とその解釈」(金沢大学教育学部国語研究室同窓会誌「良文」創刊号)

拙稿「富山・岐阜・石川県境地帯における蛙をめぐる語の歴史と体系」(「国語学研究」第10集)

なお、調査地点名は一覧表に、調査地点の位置は地点番号を用いて第1図以下の地図に示した。

調査はすべて臨地調査である。それぞれの集落に向いて被調査者に「野稗」と「稗」の写真を見せながら説明し、その名称を答えてもらうことにした。また、「稗」を栽培したか否かについてもすべての地点で調査した。調査時における語形の記録は音声表記とした。なお、一九六九年夏の調査に当たっては、永瀬治郎氏(当時、東北大学大学院生)と下野雅昭氏(金沢市立花園小学校教諭)の協力を得た。調査者間で音声の聞き取りの傾向についての差異はほとんどないと思う。

被調査者については、その選択の基準など詳しいことは前掲の論文を参照していただきたい。被調査者の生れ年と性別は一覽表にして次に示した。生れ年は特記しない限りは、みな明治何年かを表わしている。

調査地点名・被調査者一覽表

岐阜県大野郡白川村

65・52	75・40	74・41	84・49	57・00	67・44	富山県東砺波郡上平村	57・84	03・88	05・87	16・20	26・74	54・79	46・93	56・42	55・82			
田ノ下	新屋	東赤尾	西赤尾	真楮木	成出	桂	小白川	加須良	蘆倉	椿原	有家原	下田	飯島	戸ヶ野	鳩谷	萩町	馬狩	
(21・男)	(14・男)	(24・男)	(32・男)	(19・男)	(36・男)	(19・男)	(33・男)	(24・男)	(33・男)	(21・男)	(36・男)	(26・女)	(38・男)	(32・女)	(36・男)	(28・女)	(21・男)	(33・男)

富山県東砺波郡平村

19・73	28・17	39・99	38・81	48・14	47・30	47・48	61	37・59	98	36	74	47・66	53	57・83	67・22	66・09	65・19	55・42	65・04	64・21	64・89		
祖山	杉尾	大崩島	高草嶺	東中江	籠渡	大島	下梨	梨谷	田代	小来	来栖	相倉	見座	上梨	田向	高草嶺	皆律	小原	細島	小瀬	菅沼	漆谷	下島
(34・男)	(30・男)	(13・女)	(43・男)	(28・男)	(44・男)	(34・女)	(13・女)	(27・男)	(42・女)	(24・男)	(19・男)	(26・女)	(12・女)	(11・女)	(27・男)	(36・男)	(16・男)	(31・男)	(23・女)	(34・男)	(21・男)	(28・男)	(31・男)

富山県東砺波郡城端町

富山県西砺波郡福光町

42	02	57	93	94	62	74	84	75	54	55	66	18	85	95	87	47	96	06	04	05	15	25		
42	89	54	50	77	60	04	90	23	21	87	93	30	99	43	31	55	98	44	58	39	57	25		
中ノ河内	立野脇	吉見	小院瀬見	野津	嫁兼	小又	祖谷	天池	高宮	西勝寺	遊部	梅原	山田新	野田	千福丸	次郎休	理谷	蓑道	林原	上尾	打屋	大瀬戸	上田	
(26・男)	(18・女)	(33・女)	(21・男)	(24・女)	(27・女)	(11・男)	(24・男)	(19・男)	(25・女)	(30・男)	(28・男)	(21・男)	(37・男)	(37・男)	(11・男)	(大2・男)	(30・男)	(21・男)	(11・男)	(32・男)	(43・女)	(41・女)	(35・女)	(22・女)

48	40	59	69	13	58	68	77	97	77	76	67	47	56	45	62	60	70	01	11	47	01	11	55
21	75	25	11	90	83	38	38	18	93	99	52	82	23	70	27	10	56	13	90	13	90	55	55
金剛寺	金屋	青島	今町	飛驒屋	高瀬	今里	院瀬見	東西原	蛇喰	井ノ口	安清	百儀	高儀	東石黒	安居	砂子坂	二俣	田ノ島	板ヶ谷	横谷	横谷	横谷	横谷
(41・女)	(28・女)	(29・女)	(28・女)	(28・男)	(33・女)	(36・女)	(34・男)	(31・女)	(30・男)	(28・男)	(34・男)	(36・男)	(30・男)	(32・男)	(28・男)	(大8・男)	(32・女)	(42・女)	(35・女)	(32・男)	(32・男)	(32・男)	(32・男)

三、「野稗」の歴史

富山県東砺波郡利賀村

41	31	58	89	79	57	50	40	30	31	12	11	58	47	91	60								
95	85	08	39	54	18	22	24	19	01	03	22	50	45	32	04								
上	中	百	谷	大	千	中	田	阿	坂	上	細	岩	利	大	北	押	草	栃	下	高	小	湯	落
百	村	瀬	内	勘	束	口	ノ	別	上	島	島	洲	賀	豆	豆	場	嶺	原	原	沼	牧	谷	ン
(18	(14	(31	(22	(40	(13	(29	(27	(29	(39	(21	(40	(26	(27	(38	(24	(25	(40	(25	(30	(35	(30	(33	(29
・女)	・女)	・男)	・男)	・男)	・女)	・男)	・男)	・男)	・女)	・男)	・男)	・女)	・男)	・男)	・男)	・男)	・女)	・男)	・男)	・男)	・男)	・女)	・女)

「野稗」は夏から秋にかけて稲田に雑草として自生し稲の生育を妨げる。そういうことから、この植物はこの地域の人々にとって、「嫌われもの」といった意味でなじみ深いものである(注2)。

この地域で採集した「野稗」の方言は次のものであった。

1、「ヘー」

この語形については精密な観察によると「he:」の外に「ge:」、「gei:」、「se:」などの音声の変種があった。しかし、これらの間に地理的な分布は認められなかったので、これらの音声を「ヘー」で一括することにする。

2、「オロ」

白川村椿原(55・67・05・87)で採集した語形は「oromusa」であるが「オロ」に含めることにする。

3、「ヘーオロ」

4、「タベ」

5、「ガキベー」

福光町西勝寺(55・47・54・87)で採集した語形は「gakku he:」であるが、「ガキベー」に含めることにする。

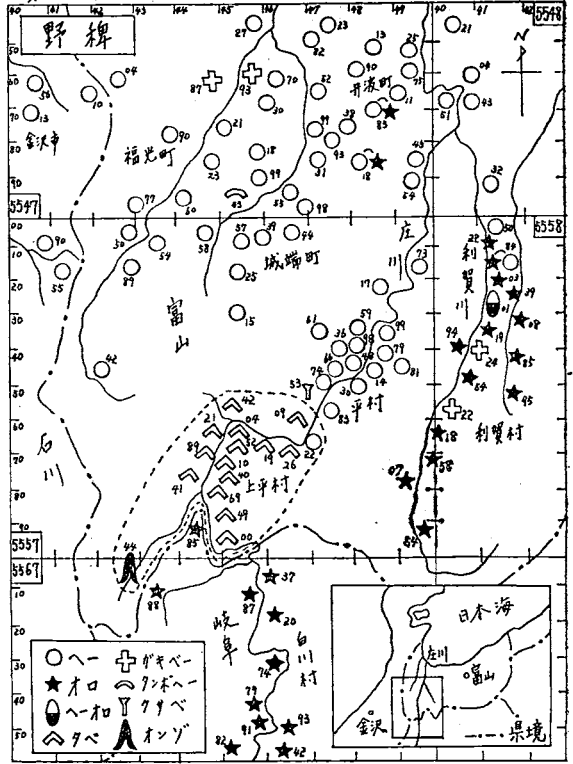
6、「タンボヘー」

7、「クサベ」

8、「オンゾ」

これら八種の地理的分布を示したものが第1図である。この分布模様によって、それぞれの語形の変遷過程を考えていくことにする。

第1図



まず、北部に広く分布する「ヘー」と南部に広く分布する「オロ」を取り上げ、どちらが新しいものであるかを考えてみることにしたい。

「ヘー」の分布しているのは平野部であり、「オロ」の分布しているのは中心部（町部）から離れた山間部であるから、「ヘー」が「オロ」に代る新しい勢力ではないかということが一応考えられる。

ところで、これに対して、もう一つの考え方があつた。すなわち、「オロ」が南部から新しく北上してきたのではないかということ

とをみると、「オロ」が新しく北上してきたものであるということ

はできないであろう（注3）。そうだとすれば、先の「ヘー」がオロに代る新しい勢力」という推定の方が妥当ということになる。実際、「ヘー」は平野部から山間部への道路に沿って分布している。

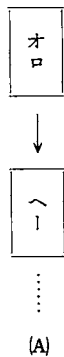
このように、分布のしかたから「ヘー」の方が「オロ」よりも新しいものであると考えられるのであるが、「ヘー」と「オロ」の両形を併用している三地点のうち、今里（55・47・68・83）と北豆谷（55・58・11・84）の被調査者は、「ヘー」の方がオロより新しい

ある。第1図によると、「オロ」は岐阜側と富山側の利賀川流域に主として分布域をもっている。そこで、「オロ」が岐阜側から峠を越えて利賀川方面へ流れ込んで来たのではないかと考えるわけである。

しかし、この推定は、どうも実情に合わないように思われる。というのは、岐阜側から利賀川方面へは峠越えができないこともないが、この峠を通じての彼我の交流は古くからほとんど行なわれていないからである。仮に、「オロ」がこの峠を越えて入つたのだと考えるにしても、それでは何故、より交通の頻繁な庄川流域に沿って北上しなかつたのかということが問題になる。わざわざ地理的な障害を越えて利賀川方面へ侵入したのなら、どうして障害のない庄川流域から侵入しなかつたのであろうか。それを説明することは、はなはだ困難である。

言「方」と報告している。

この地域における「ヘー」と「オロ」とに關しては、



という変遷を推定して間違いないと思われる。

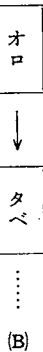
なお、「ヘーオロ」が利賀(55・58・31・01)に現われているが、この集落は「オロ」の分布域と「ヘー」の分布域の接触地帯に位置する地点であることに注意したい。この語形は「オロ」の領域に「ヘー」が新しく侵入した結果で上がったものであろう。すなわち、新旧両形が複合されて共存しているのである。

次に、「ヘー」と「オロ」の分布域の中間地帯に集中した分布域をもっている「タベ」について考えてみたい。

この「タベ」の分布域は、上平村という一村の区域とほとんど一致している(第1図において点線で囲んだ区域が上平村である)。これは注目すべきことである。この地域における現在の行政区画は中世の自生的生活共同体の区域、そして、近世の加賀藩統治下における組の区域とも異なっており(注4)、現在のこの上平という村の区域が形成されたのは一八八九年(明治二年)のことであった。したがって、この地域で「タベ」の勢力が広がったのは一八八九年以後のことだと推定できるのである。分布域内の二地点で被調査者はこのことばの語源を「田の稗」であると説明している。

なお、この「タベ」の分布域の南端に隣接する小白川(55・57・84・85)の被調査者(明治二四年生れ)は、「自分はオロと言いますが、この頃の若い者はタベというようになった。タベはハイカラなことばだ」という内省報告をしている。

「オロ」と「タベ」とを比べると後者の方が新しいと考えられる。



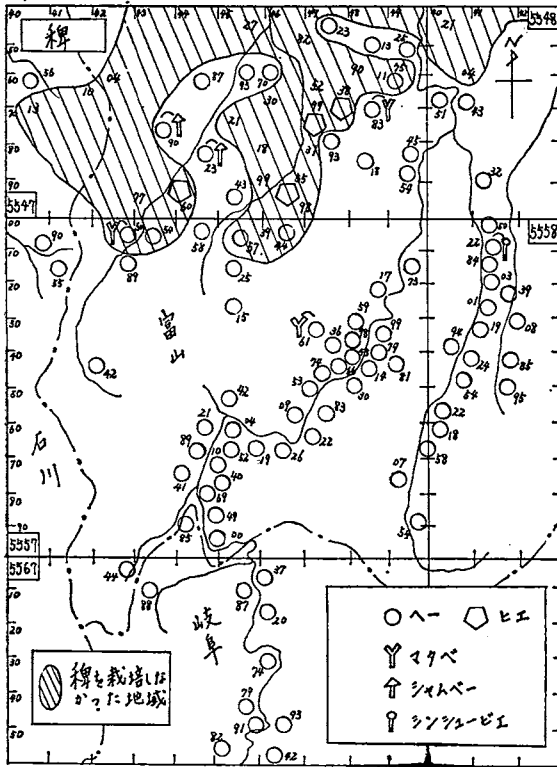
以上の(A)と(B)によって「ヘー」と「タベ」のいずれもが「オロ」よりも新しいものであることがわかるのであるが、では、「ヘー」と「タベ」とはどちらが新しいものなのであろうか。これについては後で、この地方で栽培し食用にした「稗」を表わす語形の分布と関連させて考えてみることにしたい。

次に「ガキベー」を取り上げよう。

「ガキベー」は、平野部の福光町に二地点、そして山間部の利賀村に二地点分布している。このように直接コミュニケーションのない二ヶ所に別々に現われていることから、まず考えられることは、かつてこの語形が連続して分布していたのではないかということである。しかしながら、この「ガキベー」は「食用にできず、しかも稲の生育を妨げる稗」という意味でののしって「餓鬼稗」という命名がなされたものと考えられるから、それぞれの地域で独自に発生する可能性が十分にある。しかも、この場合は、お互いの地域にそれぞれ二地点しか現われていないので、偶然、別々に同じ命名がなされたとみる方が妥当であろう。

その他の語形、「タンボヘー」、「クサベ」、「オンゾ」に關しても、それぞれ一地点にだけしか現われていないので「ガキベー」の場合と同様、各地で独自に命名がなされたものとみることができよう。「タンボヘー」は「田稗」(注5)、「クサベ」は「草稗」である。「オンゾ」は語源がわからない。この集落へは一九六七年と一九六八年の二度調査に出向いたが、二度目の調査によっても、この語形が間違いないこと——一度目と二度目とでは、被調査者が違っている

第2図



——が確かめられた。しかし、この語形がどのような経緯でこの地点に行なわれるようになったかは今のところ明らかにすることができない。

なお、「ガキベ」、「タンボヘ」などはいずれも「稗」を表わす名称が先にあつて、その上でこういった名称が生まれたと考えられるのであるが、では一体、この地域で「稗」の方言分布はどうなっているのであろうか。

四、「稗」の歴史

ここで、「稗」を表わす語形の地理的分布を示すことにする(第2図)。

この第2図において、まず指摘したいことは、平野部に語形の記入のない地点が多いことである。これは「稗」の名称がないことを意味する。また、第2図において、斜線で示した地域は「稗」を栽培しなかつた地域である。すなわち、「稗」を栽培したか否か、の問いに対して被調査が「古くから栽培したことがない」と報告した地域を示しているのである。

ところで、「稗」そのものについて少し考察してみよう。「稗」は現在どの地点でも栽培していないが、山間部では多く栽培したらしい。真木(55・57・74・69)などでは、「四〇〇〜五〇〇年前までは今のようにな食白米を食べるわけではなく、稗などを混ぜたものがほとんどであった」と報告している。また、一八六八年(明治初年)における白川村山家地方での一戸当りの「米」と「稗」の平均収穫高を比較してみると、「米」〇・五石に対し、「稗」七・四石となっており(注6)、「稗」がこの地域の主要な産物であったことが明らかである。

第2図によると、この「稗」を栽培した山間部のすべての地域に「ヘー」が分布している。この「ヘー」と表記したものの中には、先の「野稗」を表わす語形「ヘー」の場合に見たような音声的変種があつたのであるが、それぞれの間に地理的な分布は認められなかつたので、第1図と同様に「ヘー」で一括して扱うことにした。

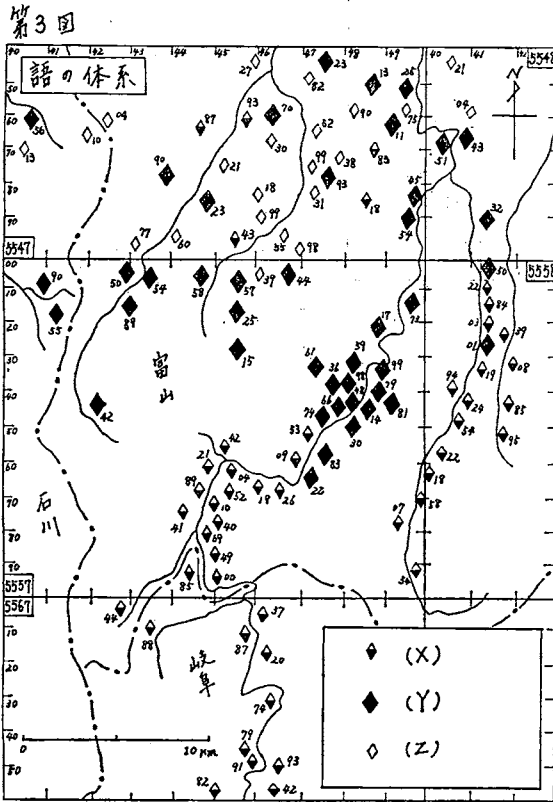
なお、「マタベ」が三地点に、「シャムベ」が二地点に、そして「シンシュービエ」が一地点に現われているが、これらの語形はいずれも「ヘー」と併存しており、「稗」の特定の種類の名称であるとみられる（注7）ので、ここでは考察の圏外に置くことにする。そうすると、第2図は「ヘー」という語形はば一色の地図になる。

ところで、平野部の一部の地点に「ヒエ」が見られる——音声的には「 h 」である。なお、先の「ヘー」で一括した音声的変種とは区別されることをわけておく——が、注意すべきなのは、この地域が「稗」を栽培しないところであるということである。この「ヒエ」は標準語から借用した語形であろう。その物がない場合に標準語を採用することは容易に考えられることである。

五、「野稗」と「稗」との対比

これまでみてきたように「野稗」の分布図（第1図）と「稗」の分布図（第2図）に同じ語形が出てくるので二者の意味の上での関係はきわめて深いと考えられる。そこで次に第1図と第2図とを重ね合わせて、「野稗」と「稗」とで構成する体系の地図を描いてみることにする。

まず、「野稗」と「稗」という二つの意味を語で区別するかどうか注目し、また、その語で表わされる意味に該当する物の世界をも考慮して体系をつくると、次のように三種の体系ができて



る。

(X)は、「野稗」と「稗」の二者を区別し、別々の名称で呼ぶ体系である。

(Y)は、「野稗」と「稗」の二者を同一の名称で呼ぶ体系である。

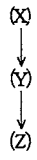
(Z)は、「野稗」と「稗」の二者を区別し、別々の名称で呼ぶ体系である。

h = 「ヘー」
o = 「オロ」など

(2)は、「稗」の意味で表すべき物が存在せず、その名称をもたない体系である。

これらの体系の地理的分布模様を描いたものが第3図である。さて、この三種の体系間の歴史的順序を考えてみよう。

「稗」が主要な産物であった地域では、これを稲田に雑草として自生する、いわゆる「野稗」とは区別して呼ぶ必要があったらうことは容易にうかがうことができる。しかしながら、食用にする「稗」が栽培されなくなれば、「野稗」と「稗」とを区別して呼ぶ必要はなくなってくるわけである。こういう観点から言えば、体系(Y)が体系(X)よりも新しいということになる。そして、さらに、「稗」をかつて栽培していた地域でも、その名称は忘れられていくであろうから、体系(Y)もしだいに「稗」そのものを古くから栽培していなかった地域と同じような体系(Z)に移っていくであろう。以上のことから、これら三種の体系間の歴史的順序は、次のように推定される。

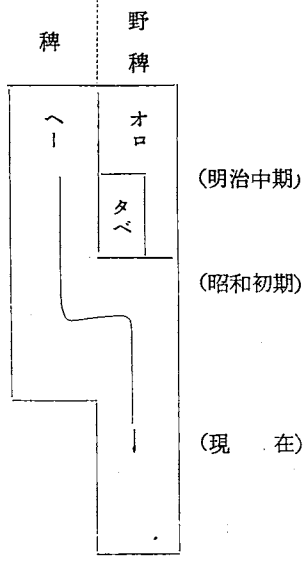


この順序は、それぞれの体系の地理的分布状態からいっても矛盾はしない。

先の第三章で「野稗」を表わす語形「へー」と「タベ」との新古を問題にしたが、結論はすでに明らかである。「野稗」を表わす語形としては、「へー」が新しく「タベ」が古いということである。しかしながら、「タベ」が古いといっても、「タベ」という語形の生まれる素地として、栽培する「稗」を表わす語形としての「へー」が古くからあったのである。「稗」が栽培されなくなると、「野稗」と「稗」とを区別する必要のなくなった今、体系(Z)の範囲は将来ますます拡大していくであろうという予測ができる。

六、おわりに

以上、「野稗」方言の歴史を「稗」の方言分布と関連させて考察してきた。ここで、推定した変化の大筋を図で示すと、次のようになる。



「タベ」は、明治以降にその領域を広げたものと考えられるふしがある。なお、「へー」という語形に注目すれば、この語形が「稗」の意味から、しだいに「野稗」の意味へと変化しているということができる。

この「へー」の語義が遷り始めたのは、多分、「稗」を栽培しなくなったという半世紀くらい前のことであろうと考えられる。

(注1) この地域の平野部は有数の穀倉地帯である。また、山間部においても、ほとんどの集落が谷間に田を持ち、古くから水稻栽培を営んでいる。

(注2)

稲田の除草は農家の主要な仕事の一つなので、「田に野稗が多生している」ということは「怠け者である」という比喩にもなる。

(注3)

「オロ」については、民間語源は一つも聞き出していない。古く『倭名類聚抄』などでは「自生の稲」である。「籾」を「オロカオヒ」は訓んでいる。

籾 唐韻云籾 音呂後漢書籾讀於路 自生稻也 (倭名類聚抄)

籾 上呂ヲロカオヒ俗云ヒツチ
イタツラ オノツカラ

操招 オロカオヒ (類聚名義抄)

籾 ヲロカヲヒ 自生稻也 (色葉字類抄)

また、東條操編『全国方言辞典(補遺篇)』によると、「種子も時かないのに偶然に生えること」を表わす「おろかに」とか「おろかばえ」という語が香川県にあることがわかる。

おろかに 籾 種子も時かないのに偶然に生えること。

「オロカニ生えた南瓜だがよくなるな」香川。

おろかばえ 種子も時かないのに偶然に生えること。

「オロカバエの桃」香川。

さらに、仙台地方などには、「間伐する」という意味で「おろぬく」という語がある。これらの「おろく」という語形と何らかの繋がりがあろうが、細かなことはわからない。

(注4)

米沢康著『五箇山研究ノート』(昭和三七年、越飛文

(注5)

化研究会発行。二二頁、一一一頁)を参照。

本稿では「タベ」と「タンポヘー」とは一応別に扱ったが、両形ともに「田稗」であるという点では同一に扱うべきであろう。なお、国立国語研究所編『日本語地図』第四集(一九七〇年)には「水田」の名称(TA・TABRO……)の全国分布図がある(185図)が、この分布図と対比すると興味深い。

(注6)

米沢康著『五箇山研究ノート』(越飛文化研究会発行、五九頁)を参照。

(注7)

「マタベ」については、小院瀨見(55・57・03・50)と梨谷(55・57・37・61)の被調査者は「種がまたになつて分れている種類の稗の名称である」と述べている。

(付記)

本稿は、昭和45年6月27日、東北大学における日本文芸研究会での発表に基づいたものであります。なお、佐藤喜代治先生、加藤正信先生、川本栄一郎先生に御指導いただいたことを記し、感謝の意を表します。

(東北大学大学院博士課程在学)